

Vol. 220 壊滅した三陸海岸に行く
～この号は2ページに渡ります～ (平成23年11月25日)

東北へ救援に行った友人達が、テレビや新聞では報道されない凄まじい惨状だと聞くにつけて自分の目で直接確かめてみたい!との思いがずっとありました。5月頃から東北出身の仲間達を何度か誘ったが実現せず、8月に東北三大祭りに参加し、元気でたくましい北の人々と出会うことが出来たが、三陸海岸を見たいとの気持ちを断ち切れず、車をチャーターして同行3人の旅となりました。

早朝5時に君津を出発して、東北道を先ず福島飯館村を目指しました。東北道は以外に空いており、順調に走り抜けて9時、福島西インターを降りて東和、川俣の町を紆余屈折して飯館村へ入ったのは11時。君津から凡そ450キロの所でした。どぶろくの『白狐』の佐々木ちえさんに電話をしたが、すでに電話は切られていて通じませんでした。

広大な田畑に低い丘が広がる飯館村には、人影が見えませんでした。人のいなくなった村にいくつかの牧場が散在していて、あちらには牛が20頭、こちらには馬が10頭位と枯れた牧草を食べる姿が見えました。道路沿いの牧場を通った時、子牛を交えた牛達が車の近くへ集まって来て、あたかも餌を欲しがると風情を見た時、この牛達はやがてやって来る厳しい冬の雪の中でどう生きていくのだろうか?生き残れるであろうか…と牛達に哀れを感じ、大変淋しい思いで通り過ぎて来ました。

誰もいない筈の谷間の小さな稲田で稲を刈る老婆と出会いました。稲は黄金色ではなく、むしろオレンジ色に変わって今まで見たことのない稲の色でありました。

その丘の上に祭りののぼりが2本立っているのが見えましたので、山道を登っていくと1900年の歴史を持つ『山津見神社』がありました。門前には、伝説の「白狐」が左右に鎮座して村を見下ろしていました。「いつもの年ですと今頃は3万人もの方々が参詣するのですが、今年は心配です。村の人々がいつ帰って来てもお参りのできる様、私は毎日2時間かけてこの山道を通って守っています。」と神主さんが話してくれました。

先日神主さんに電話しましたら、「300人くらいの方が来てくださいました。三陸を襲った大津波は、容赦なく荒れ狂い、人々に巨大な牙をむけましたが、八百万の大自然を神とする日本人々は自然に対して恨むことはありません。自然の神々は私達を見守ってくれています。災害を引き起こす一方で、恵みを与えてくれる大自然の存在に感謝しながら、一日でも早く飯館村の住民が安心して元の家へと戻れるよう、例年通りののぼりを立て、神事を行って待っております。」と言う。

車は飯館村を抜けて、相馬、亘理を経て阿武隈川を渡り仙台空港へと向かいました。仙台空港は仙台市の一つ手前の名取川と阿武隈川に挟まれた名取市にありました。テレビで見た巨大な津波が空港を襲った時、大連行が離陸し、大阪からのJALは天候不良で到着が遅れ、奇跡的に滑走路に旅客機はいなかった様です。1600人が避難し、助かった2階のレストランには傷跡は見当たりませんでした。

あの日の映像を思い浮かべながら、惘然たる思いでの遅い昼食は全く味気の無いものでした。

この夜は塩釜へ6時着、名物の「牛タン」で一杯やることになりました。

2日目は出発を少し遅らせて9時にホテルを出て、すぐの松島は多くの島に守られて被害は少ないと言われておりますが、港湾施設の地盤沈下は多い様でした。鳴瀬川を渡って石巻市へ入るとここは死者行方不明者4100人、全壊凡そ20万戸、津波は高い所で7mだったが全市水没、赤十字病院は7日間で4200人の患者が搬送され、「何とかしてあげたかった。でも何もしてあげられなかった。むなしかった。悔しかった。映画で見た野戦病院でした。」と…。

隣の女川町も中心市街地中心部の4300戸全壊、私達はさらに北上川を渡り、雄勝湾を伝って名振湾の宮城船越まで乗り入れてみました。この辺りは一村流失、一部落潰滅と言った町や村が続いておりました。船越でがれきの海岸に立つ一人の青年(23歳)と出会いました。「131戸あった村は山の上の1軒を残して全部流失しました。いつか昔の様な豊かな村が帰ってくる様毎日努力しています…」と言われ、私は北の友人達へ用意した土産物や食料を彼に渡し、困ったことがあったらと名刺を渡し、南三陸町へ深い山間の道を潜り抜けますと、空爆されて焼き払われた様な廃墟の町へ出ました。

「大津波警報が発令されました。高台に避難してください。」と叫び続けて町民の半数近くの命を助けてみずからは大津波の中へ消えて行った遠藤未希さん(24歳)は去る9月10日が結婚式の予定だったと聞きました。

今でもこの庁舎には魚貝や布が薦の様にからまり、ハタハタとひらめく様は、チベット山中の葬塔を思わせる無残な光景でありました。心からご冥福を祈りたい…昼飯を食べる気にもなれず、コンビニでおにぎりを買って過ごしました。

三陸町の津波は高い所は20mを超えたと記録されています。気仙沼は深くいりこんだ湾の今回の津波では最高で23mを超える大津波となった津波を地図上に乗せてみますと、南向きの湾が被害が大きく湾が北向きの所は被害が少ない傾向がありました。特に気仙沼はテレビで見られる様に大津波と流出したドラム缶凡そ6万本の油が流木やプラスチックと混じり合って燃焼効率を大きくし、12日間の大火災となり被害をより大きくした様ですが、この町はもともと元気の良い街ですから復興も早い様です。

この町で特記することは、町民が車で避難する人が多く、大渋滞となり逃げ遅れて津波に車ごとさらわれた人が多かった。地震、津波は車を捨てて逃げるのが鉄則のようです。

唐桑半島を過ぎると広田湾が広がり、その湾奥に陸前高田市があります。

高田松原の一本松は毅然とした姿で残っておりました。野も町も広々とした荒廃の地の涯を見る様な町です。

予想しなかったことは小さな川を10kmも逆上がって村々を津波が襲い人命を奪っております。次の目的地大船渡へ入って日が暮れました。大船渡の町の灯りに反して、今宵の宿花巻へ向かう山々は灯もなく、闇がとりわけ深く感じられました。

2日間で850キロの旅でした。次号はこの旅で何を知り、何を感じたかを書かせていただきます。

